

新病院という最高の舞台を さらなる教育・研究につなげる

昭和四十七年の医学部創設以来、他の私立医科大学とは一線を画する歴史をたどり、平成十二年には看護学部を設置して、飛躍を遂げてきた愛知医科大学。同大学はドクターヘリ導入や全国に先駆けた運動療育センターの設置、独自色の強い外来の開設などを行っており、さらに昨年五月九日には、最先端設備を導入した新病院を開院。その実現の立役者である三宅養三理事長に話を聞いた。

——愛知医科大学の特色ある歴史について教えてください。

三宅 私立医科大学の多くはオーナーの資金提供を受けて開学していますが、愛知医科大学の場合、全く資金のないところから、初代理事長である太田元次先生が資金集めに奔走しています。資金不足による波乱を乗り越え、優秀な教授を獲得して、進歩してきたのが愛知医科大学なのです。その発展は類を見ないので、偏差値

もこの二〇年間で驚異的に上昇しました。一時期は全国の国公私立をあわせた医師国家試験の合格率でトップ三に入った実績もあります。

経営面では、国の医療制度改革により平成十九年から経営が赤字化し、そこにリーマンショックが重なりました。私が理事長に就任した二十二年には、赤字が過去最大に膨らんでいました。そのため、十九年から続けてきたキャンパス

再整備の本丸とも言うべき新病院建設が、理事長就任直前に無期限停止とされていきました。

——そこからが今の三宅理事長時代ですね。

三宅 理事長就任は最悪の時期でした。しかし、これ以上悪くすることはないので、逆にチャンスだと思いました。新病院を建てなければ、この大学に将来はない。それも早くとりかからねばならない。明日のことを考えるのではなく、一〇年先、二〇年先のことを考えて決め、責任をとるのが理事長の立場です。所信表明をする際、結論は一つしかありませんでした。

人生を振り返ると、私は運が良

かったと思います。新病院建設を進めるしかない状況でもあり、着手のタイミングにも恵まれました。

資金繰りの目処がつき、入札にかけた一〇日後に東日本大震災がありました。資材や人件費が高騰した震災後の契約であれば、一・五倍以上の予算がかかっただろうという試算も出ています。また本来であれば失っていたかもしれない適切な助言で損失を免れ、良い大学づくりのために使うことができたのは幸運でした。私が理事長を拝命した直後に、島田孝一氏が法人本部長となり経営の立て直しに辣腕をふるって頂いたのも幸運でした。